

直言

の反映だといえ
ば、そのとおりだ
が、事態がこうな
ってしまつと、状
況を打開するの
はなかなか難し
い。

この一月以来の中ソ双方の威
烈な対日外交攻撃からして、ほ
ぼ予想されたことではあるが、
ソ連政府は去る六月十七日、
「日本政府あての声明」を发表
し、公式かつあからさまな対日

諸般の事情からしてやむを得
なかつたにしても、今回の日中
平和友好条約交渉では、「覇
権」問題が典型的にクローズア
ップされすぎてしまった。それ
も、中ソ対立と日中ソ三角関係
の現段階的な性格

権制をおこなつた。わが国が「覇
権」問題で苦慮しているとき
に、このような対日牽制をおこ
なつたことにはたいする政府・外
交当局の反発は無理ないところ
であるが、日中・日ソ関係で
は日中関係の方が緊密だと思ひ

「覇権」をめぐる雑音

なか
じま
みね
お
中嶋嶺雄

こまごまを得ないソ連の立場か
らすれば、当然の出方かもしれ
ない。

諸国が「覇権」反対に積極的な
のに日本政府はなぜ躊躇(ちゅう
ちゅう)しているか、といった

むしろ問題は、日本人であり
ながら、不必要な雑音をかきた
てることによって、結果的には
事態をより紛糾させる人びとに

電報を送っている。これなど
は、まったくの雑音であつて、
日中間での「覇権」問題はもほ
や共同声明ではなく、国家間の

権利・義務を伴うべき条約とし
て提起されていることをあえて
無視したものである。

雑音といえば、先日訪中して
周恩来総理と会見し、「覇権」
についての中国の強い立場を披
露してみせた藤山愛一郎氏の言
動も理解に苦しむ。藤山氏は「日
本は米中と仲良く」がオヤジ
(故藤山雷太氏)の教訓だった」
とも語っておられるが、御尊父
の時代と今日とは国際環境が
まったく異なるのであるし、今

日のような中ソ対立も当時は存
在しよつたがなかつたのである。
従つて、藤山家の家訓と日本外
交の課題とを混同する(ことだけ
は、さしあたり御遠慮いたしたか
ねはならないと思ひうがいかで
あつるか。(東京外大助教授)

「サングレ」50.6.20(4)